語られない戦争体験をめぐって
欧州の第一次・第二次世界大戦の生き残り者との断片的記憶と体験から

西浦　太郎

要旨

戦争は、戦争を体験したあらゆる世代に深い傷を残すが、戦争が終わり、戦争を体験していない子どもたちが、戦争を経験した者と生活を共にする場合、様々な有形・無形の影響を受けている可能性がある。また、これらの子どもたちにとって、戦争を経験した者の体験や記憶をいかに受け継ぎ、次の世代に引き継いでいくのかということも重要なテーマと思われる。本論では、筆者が幼少期から思春期にかけて滞在した欧州で第一次・第二次世界大戦を経験した戦争体験者との記憶と体験をてがかりに、戦争や、人間、社会のあり方について論じてみたい。

はじめに

戦争は、戦時中も戦後も戦争に関わる全ての人に長期に渡り様々な傷跡を残す。その中で、子ども時代の戦争体験が、子どもに及ぼす影響についての研究がなされてきた（森、二〇一二）。筆者は、一九八〇年台にドイツに約一〇年近く在住したが、そこで第一次世界大戦・第二次世界大戦を体験したドイツ人がいた。実際にその人と家族として生活を共にしたわけではないが、その人との関わりは、今でも印象深い体験として残っている。本論では、戦争を経験したこの人物とのエピソードを振り返り、戦争が戦争を体験した者に与える傷をドイツの歴史、イラクからの帰還兵、臨床的な観点から考えたい。そして、最後に戦争を体験した者の傷や体験、そして記憶を次の世代が受け継ぐことについて論じたい。

一、近所の友人の祖父

筆者の最も身近な戦争体験者は、家から徒歩数分の所に住んでいた友人の祖父であった。その友人とは仲が良く、互いの家を頻繁に行き来し、物心つくころからほぼ毎日遊んでいた。その家は、近所でも特に大きな家で赤い煉瓦造りだった。友人の

祖父は、一階にジャーマンシェパードの犬と住み、同じ建物の三階に友人家族が住み、友人の祖父の食事などのお世話をしていた。一階は上の階と比べて陽があまり差さず暗い部屋だった。友人の祖父は背が高く、身だしなみはいつも綺麗で、髪は櫛で整えられていた。そして、眼光が鋭く、無口で不機嫌な顔で椅子に座り、前を見つめていることが多かった。他の人と違ったのは、左脚が膝から下が無かったことだった。脚のない部分のズボンの裾はいつも綺麗に折り畳められており、ピンで止められていた。歩く時は、左足の周りをマジックテープのついたサポーターのようなものを巻いて固め、クリーム色の義足をはめていた。座るときはいつも辛そうに「あぁ」と声を出して椅子に腰掛け、義足を外していた。友人の祖父が外を歩いている記憶はほとんどなく、部屋の中で会うことが多かった。一度だけ秋の寒い時期にバス停の横の歩道を一人でゆっくりと歩いていたのを見かけたことがあるが、それっきりであまり外出していなかったのではないかと思われる。

筆者はそのときは、戦争のことをあまり知らなかったため、友人の祖父の左脚のことは謎に包まれたままだった。色々と妄想が膨らみ、「自動車事故に遭って足を失ったのか」、「何か悪いことをして足をノコギリで切られたのか」などと考えたが、切られる場面を想像すると、とにかく自分には想像もできない痛みで、大変なことがこの人の身に起きたのだろうと思っていた。友人の祖父が歩く時は、あまりにも辛そうに歩くため心配になり、声を掛けようと思ったが、いつも空気が張り詰めていたため、安易に声を掛けると怒られるのではないかと怖くなり、こちらは黙っていることが多かった。そして、その人も無口だったため、お互い沈黙になり、ひたすら重苦しい空気が流れ、友達が遊びに誘いに来るのを今か今かと待ち侘びていた。友達に遊びに誘われると、友人の祖父をその場に一人で置いていくことに後ろめたさを感じながら、逃げるようにその場を去っていた。

一、一　突然の会話

そのような中、友人の祖父に一度だけ、話しかけられたことがある。あるとき、学校が終わり、昼間に友人とその部屋に行くと、私と友人に突然、話し始めた。

「自分は第一次世界大戦と第二次世界大戦で戦った。君たち、戦争って何か分かるか？　部隊で戦っていたとき、味方の手榴弾が近くで爆発し、足を怪我した。『切らないと助からない』と言われたので、切った。それでようやく助かった。怪我のせいで、次の世界大戦（第二次世界大戦）ではあまり戦えなかった。もっと戦いたかった……。苦労をしている仲間（Kameraden）が多かったから……」。

そして、セーターを脱ぎ、こちらに背を向け、背中を見せ、これは「銃剣で刺された跡」と言った。見ると皮膚の一部が縦に白く盛り上がっていた。長い傷痕だった。そして、足元には、大きな緑色の空瓶が一本落ちており、なんとも言えない甘い匂いが部屋に漂っていた。瓶には鹿の頭が描かれ、その頭の上には白色の十字架が描かれ何か神々しい光を放っていた。私と友人は、普段、寡黙な人が突然話してきたことに驚いてしまい何も言えずに体が硬直してしまった。ずっと黙っていると、こちらを振り向き、最後に「日本とは一緒に戦ったんだよ」と優しい、なんとも言えない目で言ってきた。日本のことを知っていたことに驚いてしまったが、どう触れたら良いのか全くわからず、黙ってしまった。こちらが黙っていると、その人も黙った。結局、いつもより長く重い沈黙になった。横にいた友人が「切った時は痛かったの?」と聞くと、友人の祖父は、「痛かったよ」と言い、そのまま会話は終わった。結局、友人とその場を離れたが、外に出ると太陽の光が異様に眩しく、急に夜から真昼間の世界に出たような感覚になり、体が宙に浮いているような感じだった。それ以降、友人とはその話には触れず、友人の祖父とも話すことはなく、いつもの日常に戻っていった。

しかし、その後、友人の祖父の足元にあった緑色の瓶をドイツの様々な場所で見かけた。その瓶を見る度に、そわそわし、胸騒ぎがした。よく見かけた場所は、駅のホームのベンチ下、電車の座席だったが、決まって空瓶で捨てられていた。また、髭を生やしたあまり綺麗な格好をしていない老人が飲んでいることが多く、昼には駅で一人で寝ているような人達だった。一度、誰も見ていないことを見計らって、落ちている瓶を観察したことがある。ラベルには、白い鹿と、角の上に十字架があり、そこから後光が差していたので、何か宗教系の飲み物か、狩りをする人や森を守る人が飲むものと思っていたが、なぜ、そのような神様の飲み物を飲む人が、戦争や人を殺す話をするのかがわからず、謎は深まる一方だった。その後、筆者はドイツを去ることになり、友人の祖父、そして友人との連絡も途絶えた。

一、二　一〇年後のこと

それから一〇年が経ち、筆者はドイツの大学に留学した。あるとき、大学の友人の家の飲み会に誘われた。ドイツの大学生は、外食をする代わりに気心の知れた友達を自分のアパートに招き、一緒に飲み会をすることが多い。招待された者は、食べ物を一品か、お酒を一本持参するのが慣例であり、参加者が多いと豪華な食事が机の上に並ぶので、筆者は食事と友人作りを兼ねてそのような場に足繁く通っていた。いつものように友人のアパートで飲んでいると、酔った数人の友人が近寄ってきて、「これを飲もう！　ドイツでは、年を取ったおっさんが飲む酒だけど、美味い！　飲もう！」と酒を勧めてきた。そのとき、

なぜか急に気分が悪くなり、「飲めない」と断り、友人は面白くないやつというような顔をして去っていった。しばらくすると、他の人にも相手にされず、さらに酔っ払った状態で友人が戻ってきて、また同じ酒を勧めてきた。結局、イライラしてとても飲む気にはなれなかったので、早めに切り上げて帰ることになった。友人宅から自分のアパートに帰る時も、帰って自室に一人になってからも、イライラし、胸が締め付けられ、後味の悪さだけが残った。友人の名誉のために言うと、友人が特に何か悪いことをしたわけではなく、普通に酔って酒を勧めてくる範疇だった。自分でも自分の反応が不可解で、なぜそのような反応をするのか分からないことが余計に不快だった。ただ、どこかで知っている不快感だったことも確かで、それがまた、妙に気持ち悪かった。翌日、態度が急変した筆者を友人が気にかけて声を掛けてくれたが、自分でも理由がわからないままだった。結局、謎は解明されないまま時間が過ぎ、留学も終わった。

今回、冒頭に友人の祖父のことを書く中で、その中で友人が勧めてきた酒が、昔の友人の祖父の足元にあったあの緑色の瓶の酒だったことを思い出した。自分が飲み会の場で感じた居心地の悪さや、友人のアパートから逃げるように去った時のあの感じは、子どもの頃に友人の祖父が戦争の話をして、居心地が悪くなって去ったときの感じと似ていた。恐らく、酔っ払った大学の友人達に酒を勧められたとき、何も考えずに彼らと同じ勢いであの酒を飲むことが嫌だったのだと思う。友人の祖父とのことは、自分の記憶や意識の中に棘のように刺さって抜けずに残っていたのかもしれない。

今、改めて振り返ると、あのとき、普段、寡黙な友人の祖父が自分の過去や傷について話してくれたのに、なぜもっと踏み留まって話を聴けずに黙ってしまったのかが悔やまれてならない。ここで、もう少し踏みとどまって友人の祖父と彼の戦争の体験について考えてみたい。

二、Jägermeister について

友人の祖父が飲んでいた酒はJägermeister（イエーガーマイスター）という酒で、日本語に直訳すると「狩人のマイスター（達人）」という意味になる。留学後、再度、その酒と出会ったのは、帰国して数年が経ち、ある洋酒店で見つけたときであった。そのときは、久しぶりにドイツの物が欲しくなり、買って帰ったのだと思う。家でストレートで飲んでみると甘くて独特の薬草の匂いがし、シニア向けの酒のような感じがした。ただ、甘い上にとてもきついのでとても大量に飲めるような酒ではなかった。結局、飲みきれずに瓶ごと放置をしたが、強い酒だったのでその後、何年も持ったように思う。

この酒について説明をすると、ドイツでは一九三四年に本格

的に製造が開始され、第一次世界大戦後のドイツでは市場に出回っていたことになる。アルコール度数は三五度と高めである。また、五六種類の薬草が入っているため日本の薬用養命酒のような酒ともいえる。酒は緑色の厚い瓶に入っているが、これは外の光から中の薬草の成分を守るためである。

また、糖度が高い上にアルコール度数も高いため、ストレートで飲むときはよく回るため、危険な酒ということで有名である。ちなみに、製造方法やレシピは企業秘密のため、明らかにされていない（Jägermeister, 2021）。また、飲み方であるが、多くの場合、冷凍庫で冷やしてストレートで飲むか、最近では色々なもので割って飲むのが主流になっている。

酒のラベルには、白い鹿の頭の上に十字架が描かれており、Die Legende vom heiligen Hubertus（聖フーベルト）の伝承に由来している。フーベルトの伝承は欧州の各地では昔から様々な形で語り継がれているが、一つの例として次のようなものがある。

あるときフーベルトが、聖金曜日（キリストが捕らえられ、ゴルゴダの丘にて十字架に磔にされた日を弔う日）に狩りにでかけようとすると、妻がキリストが亡くなったその日を冒涜しないようにと懇願した。フーベルトは敬虔な妻の言葉に心を動かされたかに見えたが、狩りをしたい欲求の方が勝り、多くの従者を引き連れて狩りに出かけた。森や茂み、野原を駆け巡り、そこで立派な鹿を追いかけることになった。そして、ついに近づいて仕留めようとした時に、鹿は突然足を止め、狩人の方を向き、角の中央に光り輝く十字架が現れた。そして、訴えるような声で言った。「フーベルトよ。私はお前を救ったにも関わらず、お前はまだ私を追うのか！」。フーベルトは、恐れ慄き、武器を捨て、神に赦しを請うた。そして、木の枝を使って木屋を作り眠りについた。その後、静かで孤独な森の中、自分の罪を贖うために隠遁生活を送った。（Melchers, 2002）

また、別の中世から伝わる伝承としては次のようなものがある。

あるところに男がいたが、最愛の妻を失い、その辛さを鈍らせるために、自堕落な生活を送っていた。手が付けられない程、荒れた生活を送る中で男は、狩りにのめり込んでいった。あるとき聖金曜日であるにも関わらず、狩りをしていると、鹿の角の間から黄金に輝く十字架が現れ、フーベルトに警告するような声で言った。「お前はなぜ、私を追う・狩るのだ？」。フーベルトはこの一件に驚き、ランバート司祭のところに赴くが、司祭が亡くなっていたことを知ると、ローマ教皇のセルギウス一世のところへ赴く。フーベルトをランバート司祭の後継者に任命せよとの啓示を受けた。（Gast, 2016）。

商業的に見れば、薬草酒としてJägermeisterを売り出すた

めに、欧州で既に森や聖人のイメージが定着しているフーベルトを用いて「癒し」のイメージを広げたかったのかもしれない。しかし、フーベルトの逸話を見ると神の道に行き、宗教的に出世をするパターンはあるものの、本来であれば死を悼み、喪に服し、悲しみを味わうべき聖なる日に、自分の力を過信し、殺生を行うという神への冒涜、罪を犯した者を戒めるメッセージが込められている。これは、筆者の連想ではあるが、肥大化した自己や攻撃性、万能感を戒める・去勢した話といえるが、戦地にて人が人を殺し合う罪を犯したために、人間が人間性を失ったことにもつながるところがあるのかもしれない。

二、一　気分と寒さを紛らわす酒

前にも少し触れたが、この酒はドイツではホームレスの人が飲んでいる姿を見かけることが多く、空瓶が駅などに落ちていることが多い。この酒は、少量であれば薬効で健康に良い酒であるが、とてもきつい酒であるため、大量に飲むとアルコールが一気に体に回ってしまう。どうしようもなく憂鬱なときや落ち込んだとき、また、気分を紛らわせたいときや止まらない思考を止めるためには、格好の酒ともいえる。

ドイツで長年、社会福祉士をし、多くのホームレスと関わってきたHoltzapfel氏によると、ホームレスでアルコールの依存症に陥っている人の場合、一度に大量の酒を飲むのではなく、少量の酒を常に飲み続けることにより酩酊状態になる(1)。ホームレスの人は、酒を飲むことで自分の感覚を麻痺させ、辛い現在を生き延びるために少しずつこの酒を飲んでいるのかもしれない。

また、Jägermeisterがドイツのホームレスの人に多く飲まれるもう一つの理由は、ドイツの気候と気温が影響しているのではないかと思われる。ドイツの冬は厳しく、非常に寒い。最近でこそ地球温暖化の影響により気温が高くなったものの日本とは比べ物にならないぐらい寒い。ドイツの二〇二〇年一一月から二〇二一年二月の平均気温でさえ二・九二五度である。このような状況では、Jägermeisterのように体が一気に温まる酒は重宝され、屋外にいるホームレスであれば、尚のこと手放せなくなるのかもしれない。

ところで、友人の祖父は一体、どのような気持ちでこの酒を飲んだのであろうか。友人の祖父がアルコール依存症だったかはわからないが、いずれにせよ昼間からアルコール三五度の700mlの酒瓶を空にするぐらい飲んでいたことになるので、酔いがかなり回った中で戦争の話をしたことになる。何か忘れられない記憶があり、飲まずにはいられなかったのかもしれない。もしくは、ドイツの寒さが何かを思い出させたのかもしれない。では、次にこのことについて考えてみたい。

二、二　第一次世界大戦の寒さと塹壕戦

友人の祖父が二つの大戦を欧州のどこで戦ったのかは定かではないが、第一次世界大戦において背中を銃剣で刺されたという話からは、ドイツ、もしくは欧州のどこかの地域の地上戦に参加していたことになる。

ここで基本的なことであるが、両大戦について少し述べると、欧州に端を発した第一次世界大戦は一九一四年七月二八日に始まり、一九一八年一一月一一日に終戦を迎えている。ドイツの軍関係の戦死者は、研究により異なるが、一七七万人－二〇三万人とされる（B. Urlanis, 2003）。また、欧州における第二次世界大戦は一九三九年九月一日に開戦し、一九四五年五月八日にドイツの降伏をもって終結したが、ドイツの軍関係者の死者数が五五三万人、一般市民が二一六万人と合わせて七六九万人が亡くなったとされる（National WWII Museum, 2001）。死者数もさることながら、驚かされるのは、両大戦が行われた長さである。両大戦を合わせると欧州で合計で約一一年間、戦争が続いたことになり、友人の祖父の人生に戦争が占める割合がいかに大きく、暗い影を落としているかがわかる。

次に両大戦におけるドイツの気温であるが、第一次世界大戦の各月の平均気温を表1、第二次世界大戦の月毎の平均気温を表2に示した。

第一次世界大戦では、一部の例外はあるものの一〇月から一

表1　第一次世界大戦時の各月の平均気温（1914-1918）

年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間平均
1914	-3.0	3.1	4.7	9.8	10.9	14.6	17.6	17.2	12.4	8.2	3.4	3.5	8.5
1915	0.2	0.9	1.7	6.9	13.1	17.5	16.2	15.2	11.8	6.4	1.5	3.5	7.9
1916	3.8	0.8	3.9	8.2	13.1	12.8	16.0	15.9	12.0	8.5	4.5	1.8	8.6
1917	-2.6	-3.8	0.0	4.33	15.0	18.8	17.3	16.7	14.5	7.2	5.1	-2.1	7.6
1918	0.7	1.7	4.0	9.0	14.0	13.0	16.5	15.9	12.9	7.9	3.0	3.9	8.6

表2　第二次世界大戦時の各月の平均気温（1939-1945）

年	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間平均
1939	2.6	1.6	1.7	8.6	10.5	16.3	17.0	17.5	13.4	6.5	5.5	-1.6	8.3
1940	-9.00	-4.3	2.7	7.9	12.2	16.7	16.2	14.5	12.4	7.6	5.4	-2.8	6.64
1941	-5.4	-0.2	3.2	5.5	9.2	16.3	18.5	15.0	12.3	8.0	2.0	1.5	7.2
1942	-7.9	-5.4	1.4	7.5	12.1	14.4	16.1	17.6	15.1	11.1	3.3	2.1	7.3
1943	-0.4	2.9	5.6	9.3	12.8	14.4	17.7	17.9	13.8	9.9	2.7	0.2	8.9
1944	3.1	-1.1	0.9	8.6	11.6	14.2	17.4	19.6	12.8	8.6	4.1	-0.4	8.3
1945	-4.0	4.0	6.0	8.8	14.0	16.6	17.9	16.2	13.8	9.7	3.6	1.3	9.0

Deutscher Wetterdienst（2021）„Zeitreihe und Trends“ des Deutschen Wetterdienstes“ より筆者が作成

二月にかけて徐々に気温が下がり、一月から二月は氷点下の月が増え、相当な寒さであったといえる。しかし、これらはあくまでも各月の平均の気温である点に留意する必要があり、実際は日毎の変動があり、日中の最低気温はこれよりも低い時があったことが予想される。また、ドイツの北部と山岳部の南部とでは気候も温度も異なり、実際は表の気温よりもさらに低い日や地域があった可能性もある。また、戦線がドイツだけではなく、ヨーロッパ各地に広がり、特にロシアや東欧側の気候や温度はさらに低く、実際に体験した寒さはこれよりもさらに厳しいものだったと思われる。

近年、自然科学的な手法を用いて過去の歴史的事象を検証する研究が行われ、第一次世界大戦があった四年間は欧州は歴史的な異常気象に見舞われ、雨量が異常に多く気温が低く、戦争における死傷者が増加したことが明らかになっている。さらに、寒気に耐えるために鳥が例年よりも身を寄せ合ったために、一九一九年のスペインインフルエンザが発生し、世界中に蔓延したとの報告もある（More et al., 2020）。このような寒さの中で従軍した友人の祖父が身を置いた戦場はどのような状況だったのだろうか。

第一次世界大戦が勃発した当初は、欧州では戦争がすぐに終わるであろうという楽観論が支配的であったが、次第に戦争が長期化・泥沼化していった経緯がある。長期化の背景には様々な要因があるが、一つには戦術面の変化が挙げられる。大戦が始まった当初は、騎馬隊が敵陣に突撃し、その後に歩兵部隊が攻め込むというナポレオン時代からの戦闘方法が採用されていた。しかし、その後、各国が機関銃を導入し、敵陣への一斉射撃が可能となり、さらに突撃する側も銃弾から身を守るヘルメットが布や革製などと防御力が低かったために、死傷者が続出した。第一次世界大戦が開戦してからの最初の五ヶ月間は、両陣営の死者が最も多いとされるが、これは西部線線において上述したような装備で敵陣に突撃する戦法が採用されたことによるものである。ちなみにこの期間だけでフランス軍は、死者・戦傷者・捕虜を含め八五万人、ドイツは六八万人を失うなど、両陣営とも甚大な被害が出ている。（木村、二〇一四）。

このような状況の中、両陣営とも相手の機関銃による攻撃を避けるために鉄条網を張り巡らし、地面を堀り、塹壕を作って戦う作戦に変更した。これがいわゆる「塹壕戦」であるが、この戦法により決着が着かず戦局は膠着状態に陥ることとなった（ＮＨＫ、一九九五）。また、塹壕の中の環境も悪く、雨が降ると塹壕の地面に水が溜まり、蛆虫が発生し、兵士の間では水虫が流行し、凍傷で足が腐る者が続出した。このような過酷な状況にある塹壕に身を潜めている兵士に大量の砲弾が撃ち込まれ、最終的に大戦中の死者数のうち七割近くが砲撃による死者とされている（木村、二〇一四）。兵士は常に、緊張を強いられ、

心身を著しく摩耗し、「塹壕病 Shell Shock」と呼ばれる後遺症に苦しむ者が多く出た（ＮＨＫ、一九九五）。友人の祖父は、雨が降り身が凍るような寒さの中、塹壕に長期間、身を潜めて戦い、砲弾や銃弾が飛び交い、人が亡くなる状況に身を置いていた可能性がある。

また、第一次世界大戦では、各国が総力を上げて大量殺戮兵器を作り、それらが戦場に投入され、人が殺し合った時代でもある。英国は、機関銃や銃撃によるダメージがなく、相手の陣地に侵攻できるために戦車（タンク）を開発し、その後、ドイツ軍も戦車を導入した。ドイツ軍が毒ガスを使用すると、他国も時間差で毒ガスの開発・使用に至るなど、新しい兵器が投入されると、各国が競ってまた、兵器を開発・使用することを繰り返していった。現代では、コンピューターやＩＴ革命により人間の生活に急激な変化をもたらしているとされているが、戦争はそれとは比べ物にならない程の強度とスピードで人間に変化を強要している。これは、兵士の心身には筆舌に尽くし難い程の負荷が掛かったのではないかと思われる。

このような状況で友人の祖父は過酷な状況で死なず、よく生き延び、生還したとしか言い様がない。彼はもしかすると、戦後、寒くなると戦争のことを思い出し、戦友を助けられなかった自分を責め、止まない思考や感覚をなんとか鈍らせるために酒を飲んでいたのかもしれない。

三、傍にいたジャーマンシェパード

友人の祖父はまた、いつもジャーマンシェパードと一緒にいた。そのシェパードは、毛並みがとてもきれいで、背中の毛が黒味がかっていた。友人の祖父と似て眼光がとても鋭く、友人の祖父以外の人には懐かず、祖父の横に座っていることが多かった。その顔と鋭い大きな牙を見る度に「自分はきっといつかこの犬に喉を噛み切られて死ぬのだろう」と怯えていた。しかし、彼はなぜ犬を飼い、一緒にいたのだろうか。ここで、少し視点を変えて現代のドイツでシェパードと一緒にいることの多い人々からこのことについて考えてみたい。

三、一　パンクとネオナチ

筆者の経験ではドイツでは、三つ程のグループがシェパードと一緒にいることが多い。一つは警察官であり、ドイツでは、警察官がシェパードを連れてパトロールする光景をよく目にする。危害を加えないと分かってはいるものの、街を歩いているとどことなく威圧感があり、それだけで威嚇効果があるような感じがする。残りの二つのグループはパンクとネオナチと呼ばれるグループである。日本では馴染みのない集団かもしれないが、ドイツではパンクが極左（Linksradikalen）、ネオナチが極

右（Rechtsradikalen）と呼ばれるグループであり、両方とも頭を丸刈りにし、黒い皮のブーツを履き、シェパードと一緒にいるのを見かけることが多い。ドイツでは、家庭環境が乱れ非行傾向のある少年はこのどちらかのグループに傾倒するルートがある。

まず、「パンク」と呼ばれる人たちであるが、ドイツでは治安の悪い駅の南側で見かけることが多い。駅で人と待ち合わせをしていると寄ってきて、「一ユーロくれないか？」と聞かれることが多いが、断るとすぐに「タバコを一本くれないか」と言ってくる。彼・彼女等は多くの場合、職に就かずにその日暮らしであるため、その日を凌ぐために少しでも何かを欲しがることが多い。東ドイツ出身の友人は、自分が吸っているタバコを渡し、パンクの人はそれを二、三回吸って去っていったが、友人は「あいつらは何もないんだ。友達にもいる。貧しい奴らが多い……」と口にしていた。

また、パンクは、駅の南側の床に無気力でうなだれ、動かない姿もよく目にするが、多くは酒を飲みすぎているか、薬物を使用していることが多い。これらの人々は、政治思想的には、左翼もしくは、極左であり、アナーキーを標榜し、概して外国人には優しく、危害を加えることはない。ただ、退廃的で、将来に対する希望がないかのように見えてしまう。

もう一つのグループは、「ネオナチ」と呼ばれる人々である。ネオナチもパンクと同じでスキンヘッドであるため、一見、混同されやすいが、別のグループであり、過去のナチスのことを正当化し、民族的優位性、外国人の排斥を訴える者が非常に多い。ネオナチは頭の髪を剃り、軍服風のジャンパー（Bomber-jacke, ボンバーヤッケ）をはおり、ズボンを履いて、パンクと同じ黒色の革製のブーツを履いている。中には身長が二m近くあり、筋肉トレーニングや、擬似的な軍事訓練をしているために体格が良く筋肉が隆々とした者もいる。

最近では、暴力的で過激な極右グループは、法的に取り締まられ地下組織化しているが、多くは治安の悪い駅の南側やスーパーの前、そしてナチスの過去を賛美するために各所の強制収容所跡などに、三–四人の少人数のグループでたむろしている。ネオナチは、外国人に対する強い憎悪を持っていることが多く、アジア人のように外見で外国人だとわかると恰幅の良いスキンヘッズが数名、うすら笑いを浮かべてこちらを見て目を離さないことが多い。筆者はドイツの友人から次のような忠告を受けたことがある。「街でスキンヘッドを見つけたら、すぐにブーツの紐の色を見た方が良い。ブーツの紐が赤色だったらパンクなので、危害を加えないので安心。だが、ブーツの紐が黒か白だとネオナチなので絶対に目につかないように迂回して歩いた方が良い」。ドイツではネオナチによる外国系住民や、ＬＧＢＴへの暴行・死傷事件が後を絶たず、統一後のドイツでは、べ

ルリンでネオナチによりベトナム系移民の店に火が放たれ、住民が焼死した事件も起きている。また、二〇二〇年にも移民九名がドイツのフランクフルト近郊で射殺される事件が起きている（PBS, 2021）。ドイツは地区によっては、外国人は緊張感を持って生きることを強いられる国でもある。

このネオナチとパンクであるが、とても複雑な関係にある。外見はとても似ているが、政治思想的には対極にあり、互いに敵対視し、大都市ではグループ同士の抗争で暴力事件に発展することも珍しくない。しかし、その一方で、かつてパンクのグループに属していた者が、ネオナチに変わる場合もあり、両方のグループの人々が根っこで抱えているものは非常に近いのかもしれない。

ネオナチとパンクの共通する背景としては、例外はあるものの親が離婚している場合や、家族が不仲であり、親や家族に頼れず孤独なことである。また、高等教育を受けておらず、社会的に排除され経済的に厳しく、将来に対して希望が持てない状況の中を生きていることが多い。内面は恐らくとても不安で、様々な憤りや鬱屈した感情を抱えていると思われる。

パンクの場合は、これらの感情が内面や自分に向かい、自分を傷つけることが多い。その一方で、ネオナチの場合は、これらの感情が外、つまり政府や外国人への憎悪として出る感がある。また、所属意識が持てないために、ネオナチに入り、軍隊風の服を着て、規律や訓練を自らに課し、擬似的に軍隊に属する所属感や一体感を味わっているのかもしれない。

いずれにせよこのような状況の中で、両者は犬と一緒にいることが多い。一度、街のスーパーの前でネオナチの男の子がシェパードの顔を優しく撫でているのを見たことがある。筆者の視線に気づくときまりが悪そうにし、いつも向けてくる眼になり、睨まれたことがある。孤独な中、厳しい社会や現実を生きなければならないとき、犬は唯一、孤独や辛さを分かち合い、自分を守ってくれる存在なのであろう。友人の祖父とネオナチとパンクとを同列に扱うことはできないが、友人の祖父も戦後、何かしらの孤独を抱えて生き、その中で犬と一緒にいたのかもしれない。このようにシェパードは厳しい状況から守ってくれる忠実な相棒である面と、獰猛で攻撃的な側面も持ち合わせている。このことも友人の祖父にとり、重要であったと思われるが、次にこのことについて考えてみたい。

三、二　友人の祖父とＰＴＳＤ

二〇〇三年に勃発したイラク戦争から帰還した多くの米国兵もまた、現在もＰＴＳＤ症状や、罪責感、自殺念慮に苦しんでいる。二〇一八年に放映された英国国営放送（ＢＢＣ）のドキュメンタリー作品 "Second platoon still fighting" では、イラク戦争に従軍し、退役した軍人を取材し、人々のその後を追っ

ている（BBC, 2018）。退役軍人の「戦後」はそれぞれである。戦争で亡くなった同僚のことを毎日、思い出しては、自分を責めてしまいアルコールに依存しがちな者、帰国後、行軍の訓練の最中に突然、感情が乱れ、涙が止まらなくなる者、また、夜中に急に目覚めて落ち込んだり、感情の起伏が激しくなる者などがいる。また、帰国後、あまりの絶望感に悩まされ、自死を考える者もいる。統計によるとイラク戦争での戦闘による戦死者は、四、五〇〇人であったのに対して、イラク戦争後に自死で亡くなった帰還兵は、二〇〇五年から二〇一八年の一三年の間で一〇万人にのぼる。これは、毎日、約二五人が自ら命を絶っていることになり、戦闘による死者数よりも帰国後に自死をする者の方が約二二倍とはるかに多い。戦争は、戦闘中に兵士を傷つけるだけではなく、戦争が終わった後も、その人の人生の長い期間に渡り、精神を蝕み続け、生活を破壊する。戦争が人のこころに負わせる傷は相当深いと言わざるをえない。

ドキュメンタリーの中で、帰還兵の一人である Dorian Perez（ドリアン・ペレス）は、夜に寝るときに自分のそばに銃を置くようになった経緯を次のように述べている。「退役したときに手元に銃（Caliber A. 45）があった。それが自分になんというか安心感を与えてくれた。銃を手の届く範囲に置いて一緒に寝ることにものすごく慣れていった。最初、銃はベッドサイドの机の上にあったが、最後の方は枕の下に置いてあった。時間が経つにつれ、自分の過覚醒の状態（hyper vigilance）は下がるどころか、逆に強まって行き、銃が自分の近くにあって欲しいという想いがどんどん強くなっていった。銃は空砲ではなく、もし誰かが来たときのために実弾を込めているものなんだ」（BBC, 2018。筆者訳）(2)。

退役兵にとり、例え、戦争が終わり安全な場所にいたとしても、安易に気を緩めることは自分が無防備な状態になり、そのまま敵に襲われ・殺されるという強い不安と恐怖がつきまとう。また、寝るときは、どうしても無防備になり、意識の力が弱まるため、余計に恐怖心が強くなる。皮肉なことであるが、本来は最も休める就寝の時間帯だからこそ、緊張が最も強くなってしまうといえるが、それ程までに常に緊張感を強いられた状況が身体に染み込んでいるのではないだろうか。このような状況では、寝るときに武器がそばにあることによりもたらされる安心感は相当なものであり、何事にも替え難いものであろう。上記の帰還兵の発言は、戦争が終わり、一〇年が経過した時点のものであるが、戦場を後にし、兵役を終えて、イラクよりも安全な米国に帰国しても、彼らの内面では常に戦争が続いており、常に自分を守ってくれる存在を必要としているのであろう。一般に武器は人を傷つける危険なものとして理解されるが、戦争を体験した者にとり、武器はとても頼もしく、安心できる存在なのであろう。しかし、武器をそばに置くことによりもたらさ

れる安心感は一時的であり、それに頼ると結局、暴力から離れられず、余計に苦しみと恐怖を助長させてしまう側面も持ち合わせているように思える。

友人の祖父も、イラクからの帰還兵と同様に間違いなく、戦争による心的外傷を受けていたと思われる。周りから見れば、友人の祖父のシェパードは、獰猛で恐怖の対象であったが、友人の祖父からしてみれば、元米兵の銃と同じく、自分を守ってくれ、裏切らない数少ない信頼できる存在だったのかもしれない。銃と犬が違うのはそれが、生き物であり、自分のそばにいてくれるという点である。当時は今ほど、従軍した者の心的外傷の概念が一般化しておらず、社会の理解もなく、余計に孤独であったと思われるが、犬はとても大事な存在だったのではないだろうか。

しかし、友人の祖父は一体、どのような気持ちで二度の世界大戦に従軍し、敗戦を経験したのだろうか。第二次世界大戦でドイツの主要都市は、一部を除き爆撃され、徹底的に破壊された。また、敗戦が濃厚であったにも関わらず、ドイツは、徹底抗戦を呼びかけたためにドイツの国土はさらに荒廃した。このようにドイツは、空爆と本国での地上戦の両方を経て敗戦を迎えていることになる。

日本は中国大陸や沖縄において一般市民を巻き込んだ戦争を行なったが、いわゆる「本州」、「本土」と呼ばれる地域では、空爆による攻撃が主体であった。空爆や原爆により、多くの人の命が失われ、その被害は甚大であったが、地上戦と空爆とでは、戦争の刻み込まれ方が違う。地上戦の場合、空軍による攻撃に加え、地上部隊が人々の住む街、家に乗り込み、生活を営む街全体が戦場となる。人々の家は破壊され、農地は荒らされ、財産も奪われ、家族が殺され、女性は様々な被害に遭うことになる。さらに第二次世界大戦は一般市民や十代の子どもも戦闘に参加したため、戦闘員と非戦闘員の区別がつかない状態となり、お互い疑心暗鬼の状態の中で戦争が行われた。このように地上戦は、空爆と異なり、住民が生きる・死ぬという状況、そして戦闘による暴力を直接、体験することになり、深い傷を残すことになる。

祖父が敗戦をドイツ国内で迎えたのか、それともドイツ以外の戦地で迎えたのかは分からない。しかし、戦後のドイツでその日の食料をなんとか得て、そこから自分の人生や生活を立て直さなければならなかったのは確かである。また、友人の祖父は、従軍していたためにＰＴＳＤに苦しんでいた可能性が高く、その様な状態でどのようにして戦後を生き、あれだけの立派な家を建てることができたのか筆者には見当もつかない。

生活を再建するには相当な苦労と努力、そして精神力が必要になったと思われるが、友人の祖父のどこか毅然とした生き方がそれを可能にしたのかもしれない。振り返ると、その人はい

つも髪も整え、アイロン掛けがされたシャツを着て綺麗な身だしなみだった。部屋もいつも片付けられ、決まった場所に物が置かれるなど部屋は整然としていた。筆者は、その人には悪態を突かれたことも、怒られたことも、手を上げられたことも一度もなかった。一〇年間で感情を露わにし、唯一、まともに話したのがあの戦争の話の時だけだった。今になって思うと、酒を飲んで意識が緩まり、戦争の話をしたときでさえ、感情的にならず、戦争の悲惨さを私や孫に諭すように伝えてくれたのだから、その冷静さや感情をコントロールする姿勢には頭が下がる想いである。しかし、意識をしっかりと保ち、日々を一糸乱れず整然と過ごすからこそ、一度、怒ると制御できない「何か」を抱えている感じがし、怖さや底知れぬ不気味さも感じていた。もしかすると、友人の祖父は、感情を表に出さなかったものの、過去の記憶や体験を思い出す度に、込み上げてくる感情を抑え込み、孤独を犬と分かち合い、生きていたのかもしれない。

四、おわりに
――戦争を体験した人と次世代の課題――

最後に戦争を体験した人と次の世代に課せられた課題について述べたい。従軍したり、戦争や大きな災害を体験した者の多くは、あまり当時の体験を語らないことで知られている。これには様々な背景が考えられるが、例えば人間は、本当に危機的で過酷な状況に陥った際、そのときの体験を言葉にすることは難しい面がある。また、人の生き死にが関わり、さらに人が亡くなっている場合は、言葉にすることで罪悪感や様々な想いが生じ、沈黙せざるを得ないのかもしれない。もしくは、過去のことを想起していては、日々の生活をまともには送れなくなるため、堅く封をするのかもしれない。また、敗戦国ドイツの文脈で考えると、戦後世代の戦中世代への反感が強く、ナチス時代の全てを忌むべくものとして認識され、余計に沈黙をせざるをえなかったのかもしれない。

しかし、このように戦争を経験した人が語らず、沈黙を貫く場合、それらの人の体験や記憶は、次の世代に言葉や意識のレベルでは継承されにくくなる。そのため、戦争による影響は子どもや家族に無意識・半無意識的に受け継がれ、意識化されにくい。戦争の体験や記憶は、人の奥深くに存在しつつも、得体が知れない存在として次の世代に暗い影を落とす可能性があり、残された世代は、うっすらとその存在を感じながらも過去の遺産を引きずりながら生きることになる。

筆者の場合、友人の祖父と血縁関係にはなく、同居していたわけでもないが、子どもの時に聞いた友人の祖父の戦争に関する言葉は筆者の中に強い印象を残した。そして、その後、時間の経過と共に自然と忘れたかに見えた。しかし、成人になり思

わぬ形で再び、意識に上がりかけたが、不可解な想いと得体の知れない不快感を残して、また消えていった。そして、本論を書くにあたり、ようやく様々な記憶や体験の断片を集めて、忘れ去ろうしても忘れられなかったものが見えてきた面がある。戦争の傷や記憶は、我々の日常生活のどこかに潜み、ふとした瞬間に現れては、隠れてしまうが、友人の祖父との記憶も、現れては消え、現れては消えることを繰り返す一つの症状や主訴のようなものであった。

今回、友人の祖父の言葉や生活を振り返り、一つの場面の言葉や細部に、過去の戦争にまつわるものが宿っていることを改めて感じさせられた。しかし、それらは残念ながら、日常の些細な一場面として流され、いとも簡単に忘れ去られ、日常の風景から汲み取られることは少ない。辺見（二〇一四）は、風景を見る者が、風景を単一因果的・固定的に意味付けることに警鐘を鳴らしているが、人の言葉や風景には、見る者の想像を超える何かがあることを念頭に置く必要があろう。そして、風景を見た時の分からなさや居心地の悪さも抱えて、風景や人と向き合い続けることが、風景をより深く理解することにつながるのではないだろうか。その意味で、戦争を体験した世代が語る言葉の一つ一つの重みを感じ、風景の中にある細部を大事にし、それらに関して色々と想いを馳せることが重要と思われる。

臨床場面でも、過去の記憶が曖昧かつ断片的で、あまり話さない（もしくは話せない）クライエントと出会うことがある。その場合、面接者は、話の筋が読めず、本人の語りを曖昧なまま聴くことになるが、話の筋が分からず、沈黙が長い場合、思わず衝動的にクライエントの話や言葉をつなぎ合わせて筋をつけたくなる。そして、こちらが一方的に意味付けたり、つなぎ合わせることで、クライエントがもともと言いたかったことが言えず、面接関係が崩れていくことになる。しかし、面接者が一方的に意味付けることなしに、クライエントの断片的な言葉や身体から出る様々なメッセージを受け止め、様々な想像をする中で、少しずつその人が昔から抱えてきたものに一緒に触れられるようになり、その人の在り方が少しずつ浮かび上がることがある。このように話の聴き手が、安易に意味づけをせずに待ち、その人と共にいて考えることで、見えてくるものがあるのではないだろうか。

話を戦争体験に戻すと、残された世代は、戦争を体験した世代は多くを語らず、沈黙し、話が断片的にならざるを得ない在り方を何よりもまず尊重し、そしてその語られない苦しみや悲しみ、痛みを受け止める必要があろう。そして、それには相手の体験を理解しようとする忍耐と根気が必要となるが、そこから何かが生まれる契機となるかもしれない。

もし、これらの過去との関係を断ち、あたかも何もないかのごとく過ごせば、いずれ人間は再び、取り返しのつかない失敗

をし、大きな痛手として返ってくるように思えてならない。元従軍者、戦争の記憶、Jägermeister の酒、寒さ、ホームレス、ジャーマンシェパード、ネオナチ、パンク、これらは一見、関係のない人々や物であるように見える。しかし、これらの人や物は、寄る辺のない不安定で孤独な状況を生きている人々の世界である。過去について考え、色々な人の言葉や風景を大切にすることで、現代がまた違って見えてくるのではないだろうか。

本論を書いているのは二〇二一年であるが、第二次世界大戦が終戦した一九四五年から七六年が経過している。戦争体験者の多くの方が亡くなり、戦争の記憶が社会の多くの人々から薄れている。しかし、我々の日常や生きる現実の根っこには、過去に生きた人々の体験が横たわっていることを忘れてはならないであろう。戦争の記憶が薄れ、戦争を現実感を持って体感することが難しくなっているからこそ、過去に自分の周囲にいた身近で大切な人々と過ごした時間や体験・記憶を手がかりに戦争や当時の状況について調べ、考えることはより一層、重要となる。そして何よりも、その人がどのような立場や心情で生きてきたのかを想像し、その人との対話を続けることが、今後、求められるのではないだろうか。

註

（1）アルコール依存症は、小宮山の分類によると「C型：少量分散飲酒」「D型：持続性深酩酊飲酒」の二種類がある。前者は一人で日常の行動の合間に少量の飲酒を二日以上続ける、後者は一人で飲んでは寝て、目が覚めては飲むことを繰り返す飲酒である。（小宮山、一九九一）

（2）“I got out of the army and I had my pistol, a 45. And that was my comfort. It's like, you get so used to sleeping with your weapon, within arm's reach. My pistol started off in my nightstand ended up under my pillow. My hyper vigilance went up instead of going down as time progressed. I wanted it close and closer. This is not a pistol with an empty chamber it's locked and loaded ready if someone comes to the door.”（BBC, 2018）

参考文献

Deutscher Wetterdienst 2021 Zeitreihe und Trends des Deutschen Wetterdienstes.
https://www.dwd.de/DE/leistungen/zeitreihen/zeitreihen.html
二〇二一年六月六日取得

Gast, M. 2016 Zum Legende vom heiligen Hubertus.
https://deutscher-jagdblog.de/die-legende-vom-heiligen-hubertus/

二〇二〇年六月一一日取得
辺見庸　二〇一四　反逆する風景　鉄筆文庫.
Initiative for the Science of the Human Past at Harvard 2021 https://sohp.fas.harvard.edu　二〇二一年五月二七日取得
Jansen, T. 2020 Einen Jägermeister auf den heiligen Hubertus!. https://www.katholisch.de/artikel/65-der-heilige-aus-dem-wald　二〇二一年五月二一日取得
Jägermeister https://www.jagermeister.com/de-DE/　二〇二一年七月九日取得
木村靖二　二〇一四　第一次世界大戦　ちくま新書.
小宮山徳太郎　一九九一　アルコール依存症の入院治療　精神神経学会誌九三、一一〇八-一一一七.
Logan, J. Bohnert, A. Spies, E. Jannausch, M. 2013 Suicidal ideation among young Afghanistan/Iraq War Veterans and civilians: Individual, social, and environmental risk factors and perception of unmet mental healthcare needs, *Psychiatry Res.* 245, 398–405.
Melchers, C. 2002 *Das grosse Buch der Heiligen. Geschichte, Legenden, Namenstage.* Ludwig Verlag.
森茂起、港道隆編二〇一二<戦争のこども>を考える　―体験の記録と理解の試み　平凡社.
More, A. F, Loveluck C. P, Clifford, H., Handley, M. J, Korotkikh, E. V, Kurbatov, A. V., McCormick, M., Mayewski, P. A 2020 The Impact of a Six-Year Climate Anomaly on the "Spanish Flu" Pandemic and WWI, *Geo Helath.*
National WWII Museum. 2001 https://www.nationalww2museum.org　二〇二一年六月一〇日取得
ＮＨＫ　一九九五　ＮＨＫスペシャル映像の世紀　第二集　大量殺戮の完成　塹壕の兵士はすさまじい兵器の出現を見た.　ＮＨＫエンタープライズ.
PBS 2001 German officials say far-right crime rising as police arrest alleged neo-Nazi, PBS News hour 2021. 4. May https://www.pbs.org/newshour/world/german-officials-say-far-right-crime-rising-as-police-arrest-alleged-neo-nazi　二〇二一年五月一六日取得
Statista 2021 Statistiken zum Ersten Weltkrieg. https://de.statista.com/themen/6731/erster-weltkrieg/　二〇二一年六月七日取得
Urban, M. 2018 "2nd Platoon－Still Fighting", BBC OUR WORLD, 5. August, 2019.
Urban, M. 2018 Legacy of war, BBC. https://www.bbc.co.uk/news/resources/idt-sh/Iraq_legacy_of_war（二〇二一・六・三取得）
Urlanis, B. 2003 *War and Population.* University Press of the Pacific.

（にしうら　たろう／臨床心理学）